

Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入ったことまで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私のほうから二人を問題にして話しかけたときの彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変わっているところに気がつかずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんなことばかり言うのかと彼に尋ねました。そのとき彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口の辺りをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みも籠もっていたのです。いったん声が口を破って出ると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちょっと眺めたとき、私はまた何か出てくるなとすぐ感じたのですが、それが果たして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられたときの私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

そのときの私は恐ろしさの塊と言いましようか、または苦しみの塊と言いましようか、なにしろ一つの塊でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに固くなったのです。幸いなことにその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐしまったと思えました。先を越されたなと思えました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起こりません。恐らく起こるだけの余裕がなかったのです。私は脇の下から出る気味の悪い汗がシャツに染み通るのをじっと我慢して動かずにいました。Kはその間いつものとおりに重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくってたまりませんでした。恐らくその苦しきは、大きな広告のように、私の顔の上にはっきりした字で貼り付けられてあつたろうと私は思うのです。いくらKでもそこに気のつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分のことに一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くてのろい代わりに、とても容易なことでは動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えずかき乱されていましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が兆し始めたのです。

Kの話が一とおりの済んだとき、私は何とも言うことができませんでした。こっちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいるほうが得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

昼飯のとき、Kと私は向かい合わせに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにないまずい飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいっ帰るのだから分かりませんでした。